

研究・調査プロジェクト報告

## 安全で安心なまちづくり

——あなたのお寺の日常を見つめなおす——

備災PT 石原顕正 河崎俊宏 成田東吾

### 一、問題提起

現代社会では、さまざまな危機対策が不十分な状況が後を絶たず、追い討ちをかけるように、自然災害が頻発し、人間社会の脆弱さを露呈している。その予知できない自然の猛威は、突然、人々に大きな被害を与え、社会的な不安の一因ともなっている。さらに世界的に問題視されている大きな社会環境の激変により、人心の荒廃は深刻な事態に追い込まれ、改善の道すら探るすべを失っているのである。

今こそ、時代の変化や社会の実情に敏感に対応し、寺院の社会的役割、宗教者として「救済の理念」の実践が求められている。

しかし、私たちの防災意識はいまだ「他人事」であり、危機に陥った場合の心的衝撃は計り知れない。まず事前対策として、日頃から社会とどのように関わっていくのかという視点で思考を深めていくことが必要ではないだろうか。現在は、災害を防ぐ『防災』という概念が柱となった対策が進められている。行政を中心とする防災体制の見直し、広域応援協定等支援システムが整ってきたとはいえ、依然として被害は拡大している。これは、防災対策を主として

担ってきた関係者と、一般市民との間に横たわっている、災害に対する意識や認識のズレが原因の一部と考えられる。かつて防災は、研究領域として専門家に委ねられ、その情報内容が一般社会へ公開されることよって起こる反応が複雑であるとの懸念が、社会に生きる人々の危険認識の発達を阻害してきたものと思われる。

このように、社会の中で危険要因に対する関心が深まらず、たとえ大災害を目の当たりにしても、「それは他人事」「自分にはありえないこと」として、市民の防災意識の高揚は依然として一時的にしかすぎず、時間と共に次第に世間の記憶から薄れ、忘れ去られてしまうのが実情である。

近年、政府や地方自治体の防災対策は、国民一人一人に自己対策を求めており、私たちはそれぞれの地域で予想しうる災いから日常生活の基盤とわが身を守る事が不可欠となった。

「自分の命は自分で守る」、一人一人がわが身の命を守り生きる。そして、多くの命を守り生かすことを念頭に被害を最小限にとどめ、生き延びるための『備災』、災いを軽減する『減災』への取り組みが急務と考えられる。

災害に遭うと、必ず何らかの被害が生じる。残念ながら災害に遭わないようにするための特効薬はない。私たち自身どこかで「自分にはありえない事」「遭ってしまったときは誰かが何とかしてくれる」「その時に考えれば良い」と思っただろうか。

そのありえない事態に「どう対処すべきか」、事前に考えるような前向きな姿勢取り組みが重要である。まず、災害について考えてみることから始めてはどうだろうか。

- ・ 災害とは、自然災害に限らずさまざまある。
- ・ 長年住み慣れたお寺の立地・地形・環境について考える。
- ・ 突然の事態において、「どう行動すべきか」を想像してみる。

## 二、災害の種類

- ・危機、不測の事態

（個人レベルから地球レベル）

人の死傷、物的損壊、財産喪失、組織の打撃

- ・組織内の経営（労働争議、労働災害）
- ・組織外との関係（商品の欠陥、スキヤンダル）
- ・産業災害（爆発、火災、危険物流出、原発事故）
- ・自然災害（地震、台風、水害、噴火、津波）
- ・犯罪（テロ、脅迫、誘拐、凶悪犯罪）
- ・その他（戦争等の国際問題）

※新たなウイルスなどによる感染症、被爆への脅威

この中で、我々は様々な自然災害について考えていく。

- ・大規模地震↓大規模火災、津波

- ・台風

- ・豪雨

- ・竜巻

- ・噴火

### 三、事前準備としてまずしておくべき事

- ・非常時に持ち出す物のチェックリストを作成する。
- 過去帳・ご本尊・尊像・寺宝などの確保や保管の方法を決めておく。

### 四、地震について考える

#### (一)、地震発生の瞬間

「いつ、どこで」遭うのか。その時、わが身の命を守れるか。

〈お寺か〉 就寝中、朝勤中など

〈出先か〉 車の中、電車の中、繁華街、レストラン、映画館など

#### 〈パニック発作〉

人間の身体にある「火災報知器」のようなもの。

生命の危機を早く感知し、警告を発した状態。

例) 心臓がドキドキする。汗がでる。身体の震え。

息苦しさ、または息が切れる感じ。窒息するような感じ。

胸痛、または胸が苦しい感じ。吐き気、またはお腹が苦しい感じ。

めまい・ふらつき。周りが現実でない感じ。

気が狂ってしまうことへの恐怖。死ぬことへの恐怖。

感覚神経が麻痺する感じ。冷感または熱感。

※こうしたことは、人間に備わった正常な反応である。

その時、あなたは、「何を」するか。「何が」出来るか。

(二)、揺れが収まったら

わが身の安全を確保できる場所へ移動する（帰宅困難の場合も想定する）。

周囲の状況を把握し、対処行動をはじめ（周囲の混乱に巻き込まれないこと）。

(三)、安否確認

寺族、親族の安否確認（離れている場合の確認方法を事前に決めておく）。

(四)、被害状況の把握

〈屋内〉

建物の状態を見て、全壊または倒壊の危険がないか、安全が確保できるか、他の場所に避難が必要かを判断する。  
特に堂内の場合、荘厳具・仏像・位牌・宮殿・厨子・天蓋・幢幡・燈籠・磬子・鳴物台などの転倒、落下を点検する。

〈境内・墓地〉

石碑・石燈籠・墓石・山門・鐘楼・塀の倒壊。

(五)、情報収集について

可能な限り早めに、テレビ・ラジオ等で情報を収集する。

固定電話・携帯電話などは不通になる（携帯用伝言ダイヤル・SNS等は可）。

正確な情報により的確な判断をする（デマや憶測に対する情報精査をする）。

可能な範囲で、自転車・バイクで周囲の状況や檀信徒の安否を確認する。

#### （六）避難について

リュックなどを用いて荷物を背負い、両手をあける。

ヘルメットや帽子で頭を保護し、ひもで締められる靴を履く。

場合によっては、長い杖や棒などで、側溝や穴などを点検しながら歩く。

#### （七）二次災害について

地震災害の場合、他に避難する際は津波の危険、家屋の倒壊などにより火災が発生するなどの、二次災害が発生することも考える。

大規模地震では、都市部や市街地では、広域火災が発生することも想定し、大規模火災を未然に防ぐ努力をする（寺院や近隣から火災を出さないことが肝心）。

### 五、風水害について考える

風水害は地震と異なり、予め危険予測が可能であるため、気象情報などから早めに対処をする。

はじめに、「避難準備・高齢者等避難開始」が発令されたら、対象者は速やかに避難を開始する。次に、「避難勧告」が発令されたら速やかに避難する（「避難指示」は最後通告）。

避難準備情報など情報が細分化されるため、判断が遅れることもあるので、危険が感じられた場合には自主避難することも考える。浸水が始まってからの避難は危険であるため、水深が腰の高さに迫っていたら、自宅の二階や高台で救助を待つ。水深が深くなれば、自動車はエンジンが止まるため、車での避難は早めに開始する。大雨や、河川の

氾濫による、土砂崩れ、土砂流入の危険個所を事前に把握し、最大限の対処をしておく。

## 六、おわりに

以上幾つかの場合を考えてみたが、最後に備災に役立つであろう言葉を示しておく。

・〈津波でんでんこ〉の教訓〉

津波の時は、家族のことも構わずに各自がでんでんばらばらに高台へ避難する精神は「自分だけが助かる」のではなく、「それぞれが生き延びて、生きて再会できるように」という言い伝えである。

・〈誰かを待っていたり、迎えに行かない〉

「家族がバラバラで被災した場合には、それぞれ高台に避難し再会できることを事前に約束しておくこと。

・〈―東京防災―〉

今やろう。

三〇年以内に七〇%の確立で発生すると予測されている、首都直下地震。

あなたは、その準備ができていますか。

一つひとつの、小さな備えが、あなたを守る盾になる。

人は、災害と戦える。

今やろう。災害から身を守る全てを。

防災は、大きな被害にならないように、備えること。

備災は、いざ災害が起きたときを考え、役立つ知識を持つこと。

東日本大震災では、寺院が避難所として多くの被災者を受け入れ多くの「命」を寺院がではなく、寺院を含めた地域の人のつながりが「命」を救ったのである。



# 災害に備える

—大切な命を自ら守り、他の命をも守り生かすために—

## お寺の役割

現代社会に於いて、お寺には災害時をはじめ社会的困難に対する救済の実践が求められ、地域の防災資源として、さまざまな役目を果たすことが改めて期待されています。さらに教師や寺族が防災や支援に関する知識や実践方法を身につけ、被災時のリーダー的存在になることが求められています。

## → 寺族会議のすすめ

災害時には、住職、教師をはじめお寺にいる寺族全員の理解と協力が不可欠になります。事前に住職・寺庭婦人・寺族で話し合いをして、災害時の対処をあらかじめ話しあっておく必要があります。お寺は、災害時にも頼られる存在であるということを忘れてはなりません。

**寺族会議は、災害に備えるためのお寺としての第一歩**であることを認識しましょう。

被害を最小限にとどめるために備えておきましょう

## 安否確認

- 緊急時では固定・携帯電話は不通となることを予期し全員の安否確認方法を考えておく。

## 非常持ち出し

- 緊急時に護持すべきご本尊・仏像を移動／格護する場所を特定しておく。
- 過去帳・檀信徒名簿など重要書類。(過去帳や名簿はバックアップをとっておく。)
- 非常持ち出し品チェックリストを作成しておく。

## 境内建物の点検

- 倒壊、ガラスの飛散、屋根瓦などの落下の危険があるところの確認。
  - ・本堂・客殿・庫裏・諸堂・山門・鐘楼・塀など。
  - ・境内・墓地：石碑・墓石・燈籠など。

## 堂内の点検

- 仏像・位牌・天蓋・幢幡・燈籠等、転倒、落下の危険があるものの確認。
  - ・鑿子・鳴物台など転倒、仏具が散乱することが多い。
  - ・被災後の現状復帰に向けて写真を撮っておくと効果的。
  - ・転倒・落下防止のため滑り止めシートなどを用いて防止策を講じる。

## 情報収集

- 日頃から地域との連携をはかり、非常時の連絡体制を確立しておく。
- 近隣寺院や日青会など 日頃から連携を語る。
- 檀家さんと連絡を取り合う方法を確立しておく。
- 周囲の地形や特徴を把握し、危険個所を事前に把握しておく。
- お寺から指定避難所までのルートを確認しておく。
- 地域の主要機関連絡先(市役所・病院など)を把握しておく。

## 防災用具の点検

- 火災報知器、消火器、救急箱等の確認しておく。
- 消火器の使い方、応急手当の方法を把握しておく。

## “お寺”を守る

社会への対応

### お寺を守るための行動を考えましょう

#### 被害状況の把握、情報収集

- ・被害状況を把握し、迅速な復旧を目指すようにする。
- ・地域の人々と連携をとる。
- ・危機対応能力のある人材（マンパワー）を確保しておく。

#### お寺として、何ができるのか。

- ・社会の求めに応じる覚悟や心構えを相談しておく。
- ・オープンスペースとして境内・駐車場を解放するのか。
- ・お寺は避難者の受入が可能かどうか。
- ・お寺をどこまで解放するのか。
- ・地域住民への一時避難所や支援ボランティアの拠点として機能するのか。
- ・物資の提供はできるのか。
  - 備品などの数量や保管場所を確認しておく。
  - 「ローリングストック法」で備蓄（食品や日用品を少し多めに購入し、日常の中で補充）する。
- ・寺族の居住スペースの確保。
  - 寺族の暮らしを確保するために、それぞれの役割分担をどうするのか。

被害状況や公的避難施設の状況によっては、避難や支援が長期化することも予想されるため、寺族に対する精神的ストレスや経済面での負担も覚悟しておかなければなりません。

#### ※重要事項記入欄

## 緊急連絡先一覧

### 寺族

名 前	携帯番号	勤務先・学校名	電話番号

### 行政・地域・宗門関係他

機 関	名 称	電話番号	備 考
行政・地域			
電気 ガス 水道			
医療機関			
宗門関係			

<被害を受けたら管区宗務所(災害対策支部)へ>

大規模災害時に関わらず、地震や豪雨・竜巻など自然災害の被害を受けた寺院は、管区宗務所へ被害状況を報告しましょう。